

大学院生による模擬面接体験の分析

～臨床心理士候補生が面接場面で陥りがちな困難と臨床教育の課題についての一考察～

石谷 真一

(人間科学研究科准教授)

I 本取組の概要と狙い

筆者は3年前より、本研究科臨床心理学分野の教員の理解と協力を得て、大学院1年目の院生に、学部生のボランティアを対象にした模擬面接の機会を与えてきた。同時にその面接過程を筆者と院生とが共に振り返ることを通して、実際のクライアントとの心理面接を控えて、院生が抱えている不安や葛藤の明確化を促したり、面接場面で陥りやすい困難にどのような態度で臨むかについて助言を行ってきた。また院生とのこうしたやり取りから、臨床心理士を目指す院生に共通する問題点や課題とは如何なるものか、またそれに対しどのような指導・教育が求められているのかについて、貴重な情報を得ることもなった。さらに心理面接におけるプロセス研究、すなわち二人の心にどのような状況が生じ、それが各々の心に如何なる変容を引き起こすのかという、面接過程の分析についても示唆の得られるところが多かった。模擬面接なのであくまでアナログ研究の域を出ないが、反面、面接に臨んだ両者から感想を聞くことができ、かつ面接場面のやり取りを録画し、映像資料として活用できるなど、実際の心理面接では得られない貴重な情報を得ることもできた。このように、院生の課題の解明、教育法開発、そして面接過程の研究という三重の目的を立てて進めてきているのが本取組である。

本取組については、既に本紀要において前々年度および前年度にも報告した。この取り組みの詳細は、年度によって少しずつ異なっている。というのも、筆者自身の心理面接のプロセス理解が次第に変化しており、それが模擬面接の進め方や院生の面接体験のどの側面に焦点を当てるかの違いとなって表れているからである。焦点の当て方の違いに応じて、院生の面接場面での体験の異なる面がクローズアップされてくる。そんなわけで、今年度の模擬面

接の取り組みとそこで経験された院生の面接体験、そして院生が模擬面接を振り返ることで得られた面接体験についての理解の変化を、院生および模擬面接に協力した学部生のプライバシーに配慮して、可能な範囲でここに報告する。また本取組をもとに、心理臨床実践に臨むにあたって大学院生が陥りがちな困難や問題点と、それに対応した臨床教育のあり方について、若干の考察を行うことにする。

II 発達臨床的視座から見た心理臨床の営み

(1) 発達臨床的視座とは何か

まず、筆者の心理臨床の立場について簡単に述べておきたい。上述したように、筆者の臨床理解が本取組の方法や面接過程の分析を大きく規定しているからである。筆者の臨床理解を一言で表現するならば、発達臨床的視座と呼びうらと思う。ただし筆者の言う発達臨床とは、発達障害児(者)を対象とした心理教育的アプローチとは異なるものである。詳しくは拙著(石谷 2007)にあたってもらいたいが、要諦だけを述べるなら次のように言い表すことができる。すなわち、心理臨床の関係の中で生じた取り組まれる情緒交流とそれを介した心理的变化の過程は、親子関係の中で生じる子の(そして親の)心理発達の過程と、根本的なところで同質のものを含んでいる、という観点である。親と子の間には通常、濃密な情緒交流が生じ、それが故に親は子によって様々な情緒を触発される。そうした情緒体験を親がどのように扱うかによって親子の関係性は異なるものになるし、それによって子がどのように自分自身の情緒体験に向き合うかが左右される。同様に、セラピストの心にもクライアントとの臨床的関わりの中で様々な情緒体験が生じ、それとどのように取り組むかによって、クライアント自身の情緒的問題へ

の対処を促進できたり、できなかつたりする。このように関係場面での相互交流によって生じる情緒体験と、それに対する関係の構成員各々の対処が、両者の関係性と心理的変容に大きく関わっているという理解が、筆者のいう発達臨床的視座の中核にある。

上記のような心理臨床の捉え方は、乳幼児の関係発達の知見を心理臨床の営みの理解に生かそうとする、いわゆる「発達論者」の立場に多くを拠っている。「発達論者」の臨床過程の捉え方も一様ではないが、乳幼児が親・養育者との非言語的媒体を介した情緒交流から心の原基あるいは障害の素地を作り出すと見る点は共通している（例えばスターン (Stern, D. 1985)）。それゆえ、大人のクライアントとの言葉による心理面接においても、言語を介した思考の背後で、声の調子や表情、ゼスチャーなどでやり取りされている情緒交流にも留意し、情緒体験を心理的变化を生み出す重要な要因と見なすのである。したがって、**間主観性 (intersubjectivity)**、**相互調整 (mutual regulation)** といった、関係性と情緒の両体験にまたがる概念が鍵概念として用いられる。筆者の視座は、一方でこうした実証的な乳幼児研究を土台にした「被観察乳児」の発達理論に基礎を置くが、同時に力動的心理学の典型的な手法である発達史の再構成によるクライアントの心の始原の理解、すなわち「臨床乳児」の発達論にも重きを置く。こうした二足のわらじの態度はスターン (上述) によれば両立不可能なものと思なされるであろうが、筆者はむしろ両者の観点を (両者の緊張関係を解消してしまうことなく) 対話させるところから、さらに深化した発達臨床の視座が得られるのではないかと考えている。このテーマについては本稿ではこれ以上深入りはしないが、「発達論者」が鍵概念としている**間主観性**と**相互調整**という概念、および「臨床乳児」の発達論で早期母子関係と乳児の心の誕生を説明する鍵概念である**投影同一化 (projective identification)** については、以下に触れておきたい。これらの概念が焦点を当てている心理-関係の事象こそが、本取組においても最も注目するところであるからだ。

(2) 間主観性と相互調整

上述したように間主観性と相互調整は、発達論者

にとって、親-乳児の関係発達理解と心理臨床の営みの理解に欠かせない概念である。両者の概念は重複する面もあるが、差異も含まれている。まず**間主観性**はその字の如く、関係を構成している二人以上の人物の主観が共有・合致している心理状態を指している。**間主観性**は乳児の誕生直後から見出すことができそれゆえ何らかの神経生物学的基礎があるとも考えられている (Bräten, S., 1998)。乳児が最初から**間主観的**心理状態を求める傾向性、すなわち**間主観性**への動機づけを持っているとまで言えるかどうかは研究者によって意見の異なるところだが、親子の間に生じる**間主観的**関係性から乳児個人の心は育ち始めるし、もしこの**間主観的**関係が深刻に阻害されれば乳児の心の発達もまた逸脱したものとならざるを得ないとされる。スターン (2004) は上記の意味で、発達最早期の親子の**間主観的**関係性を、**間主観的母体 (intersubjective matrix)** と名づけている。**間主観的**な心理状態の共有は、子の成長発達に伴ってその共有の様式を変えていくけれど、**間主観性**そのものは人間関係に生じる心理的現象の必須の一側面だし、人と人とを結びつける強力な動機づけの一つであり続けるとされる。心理臨床場面においても、**間主観性**は臨床的関係性の重要な要素となるし、クライアントの心に変容を引き起こす決定的な情緒体験と見なす臨床家 (Stolorow 他 1987, 丸田 2002) も多い。

一方、トロニック (Tronic, E., 2007) に代表されるような親子の情動の相互調整を重視する発達論者は、乳児と親との間に生じる**間主観性**の多くが、両者の能動的な相互調整の結果、達成された心理-関係性の状態であると見なす。この立場の発達論者は、親子の相互調整と乳児の自己調整とを最初から存在する二つのシステムと捉える。乳児は生まれ落ちた時から、ある程度心身の自己調整を行い得るだけの組織化されたシステムを備えている。しかし自己調整を全て乳児自身が行い得るわけもなく、親によって外から調整されることで、自己調整は補完されねばならない。したがって親による乳児の情緒状態の適切な評価 (解釈) と、それを適切な状態に修正するための働きかけという親の能動性が強調される。しかし同時に、乳児もまた親がその意味を読み取り得るような一定の情緒表現を行うことができわめ

能動的に相互調整に参加しているとも言える。たとえばスターン（1985）は、生後半年までの乳児をもつ母親は、乳児の自己を調整する他者であるとしたが、母親がこの機能を果たすためには、乳児が母親にとって、母親の自己を調整する他者でもなければならぬ。両者は非対称的だが相互的でなければならないのだ。

しかも乳児と母親との相互作用の実証的研究からは、ごく健康な母子の間でさえ想像以上に意図や情緒のミスマッチが生じていることが明らかにされている。重要なのは、情緒の齟齬やミスマッチを相互に修正しようとする修復のプロセスである。乳児は望まない母親からの働きかけを、目をそらしたり、嫌がったりすることで、母親の働きかけを変えるようなサインを送ることができる。反対に母親からの働きかけを求め誘うサインも積極的に送っている。そこでこの修復に向けたプロセスこそが相互調整なのである。トロニック（2007）は乳児の発達においてこの修復のプロセスこそが、乳児の自己効力感や弾力性、他者への信頼を強化すると述べている。さらに母子の相互作用の観察からは、母親とともにいる乳児が常に母親と相互交流しているわけでもないことが確かめられている。視線をそらしたり表情があいまいになったりすることで、母親との交流から一時的に引きこもったり、他に関心を移したりもしている。そうしてしばらくすると母親との交流に復帰する。自分に引きこもることと母親と交流することは循環しているのである。

そこで親子の情緒の相互調整という観点からは、間主観性とは相手の情緒状態に対する互いの評価（解釈）と働きかけ（反応）によって共創造された、心理と関係性の両面にまたがる現象と捉え直される。それゆえ間主観性とは対照的な相互調整の失調という事態も想定できる。たとえば乳児の関係からの一時的な引きこもりを、抑うつ的な母親が乳児に拒絶されたと解釈し、それによる傷つきから乳児への情緒的関わりを強く手控えたとしたら、乳児は相互交流を再開することが困難となる。これが繰り返されたなら、乳児は母親との関係を情緒的交流の困難な関係性と見なし、母親への情緒的な希求が低下するだろうし、母親の子への情緒的関わりはますます乏しくなるかもしれない。相互調整という概念か

らは、関係性が親子双方の心の成長の母体（マトリックス）となると同時に、上述のように両者の発達を阻害し、親から子への葛藤の世代間伝達が生じる培地ともなるという視点も導き出される。臨床場面においても、クライアントとセラピストの間には活発な相互調整のプロセスが生じていて、それは間主観的体験を呼び起こすこともあるれば、相互調整の失調によってクライアントの変容を引き出せない場合もあるのである。したがって間主観性とは絶えざる相互調整のプロセスにおいて一時的に生じる動的な均衡状態であり、得られては次の瞬間には失われるといった類の体験と考えられるし、間主観性自体が当事者の心の変容に影響を及ぼすというより、むしろ間主観性に至る相互調整のプロセス全体が心の変容に与っていると考えるべきだと思う。

(3) 投影同一化と間主観性

投影同一化は「臨床乳児」の発達論において、発達と臨床とをつなぐ、また関係性と個人の心をつなぐ鍵概念である。投影同一化はもともとクライン（Klein, M.）によって原始的な防衛機制として見出された概念であり、専ら患者の無意識的空想として捉えられていた。しかしビオン（Bion, R.）、ローゼンフェルド（Rosenfeld, H.）らによって、投影同一化は患者の心の中でのみ作用するのではなく、患者の相手となる治療者との関係に無意識的空想が具現化されること、すなわち対人交流と心理のプロセスとが表裏一組に分かちがたく結びついたものであることが示された。また投影同一化は病態水準の低い精神病圏や人格障害圏の患者の心と、患者のもつ人間関係で大々的に作動している病理的なものばかりでなく、健常者の他者の心への共感的理解といった日常の関係における情緒交流にもごく自然に見出されるものであること。またビオン（1984）のコンテイナー・コンテインド・モデルのように、生まれただけの、まだ心をもつとは言えないように見える乳児がどのようにして心をもち始め、心理的体験を生み出せるようになるのかという心の起源を説明する概念の不可欠の前提ともなっている。

投影同一化を人間的な心の営みとして捉え直そうとするオグデン（Ogden, T., 1994, 98）の試みは極めて説得力があるし、かつ上述した関係—心理両

面にまたがり、発達と臨床を橋渡すものとして投影同一化を捉えている点で、「発達論者」の相互調整の概念との対比も興味深いところである。以下、オグデンの投影同一化の理解を簡単に述べ、この投影同一化の観点から先述した間主観性の捉え直しを試みる。

オグデンは投影同一化を、彼独自の分析の第三主体と間主体性 (intersubjectivity の邦訳だが、その意味内容から間主観性ではなく間主体性と訳されている) という観点から捉え直している。分析の第三主体とは、精神分析療法をはじめ情緒的に深い交流が生じる心理臨床の関係において、セラピストと患者の間に立ち現れるもう一つの主体のことである。臨床経験を思い起こせば容易に想像できることだが、患者はセラピストを、実際のセラピストとは異なる患者の心に呼び覚まされた対象像を投影して感じ取っているし、関わっていく。同時にセラピストもまた、セラピストの心に呼び覚まされた対象像を重ね合わせて患者を理解し関わる。そこで両者が実際の相手とは別の、自分自身と相手との奇妙なアマルガムと向き合うことになる。つまり患者もセラピストも直接に相手と交流するのではなくて、分析の第三主体と関わっているのだ。投影同一化 (特に病理的な) はこの第三主体が肥大して両者の主体性のかなりの部分をのみこんでしまい、患者もセラピストも臨床場面ではそれ以外の自分とは異なる自分になることを強いられる。このとき両者の間には、セラピストはこのように思っているから私 (患者) はこう振舞わざるを得ないとか、患者は私 (セラピスト) をこのように動かそうとしているからこう応じざるをえないといった、間主体的想定に自分自身が縛られることが生じている。このように投影同一化が強く作動しているときには、非対称的だが相互的な間主体性が具体化・現実化し、両者が普段の自分とは異なる自分にならされているのだ。しかしオグデンはこうした自己の変容を決して否定的にばかりは見られないと述べている。というのも、投影同一化のようなプロセスを経て、自己が変容するのでもない限り、心はそれ自体が持つ自己閉塞性を打破できず、変容も発達も考えられないからだと述べている。しかしそのためには、第三主体に取り込まれてしまった自分の主体を取り戻すプロセスが不可欠で

ある。そうでなければ、自己の閉塞性を打ち破れるのは、その相手との関係の中に留まっている間だけとなり、相手との関係を終わることができなくなってしまう。つまり間主体性から覚めること、すなわち脱錯覚的な体験が必要とされるのである。したがってオグデンは間主体性とは両者が新たな心理的存在として生まれ直すために、逆説的だが相互拘束的な関係にあえて身を置く試みであり、情緒的に一人であることからくる心の閉塞状況を打ち破ることこそが、間主体性を希求する無意識的な動機であると考えている。投影同一化は上記の間主体性の性質が特徴的に現実化する契機なのだ。

投影同一化という現象の理解を発展させたオグデンの間主体性の理解と、発達論者のいう間主観性や相互調整という概念とをどのように橋渡しできるかは今後の課題であるが、特に相互調整という概念とは、関係に参加する構成員がそれぞれもとの自分を越えた心理的存在に至るとする点で類縁性を予見させる。この点については別のところで論考を試みたいと考えるが、ともに心理面接という特殊な関係の中で生じる、クライアントとセラピスト両者の心の変容プロセスに言及しようとするものとして、今回のような面接での当事者の体験を分析するには欠かせない観点である。

(4) 発達臨床の視座から見た面接過程の着眼点

それでは最後に、上記の論考から、面接過程をモニタリングする際にどのような着眼点が導き出せるかを述べる。オグデンに従えば、心理面接という二つの心が情緒的に関わり合い、影響し合う場に参加する者は、多かれ少なかれ、一人である時とは異なる心理的存在になっている。それは時には病理的な投影同一化のように自我違和的な強い拒絶反応をもって自覚される (からといって、巻き込まれず以前のままの自己でおれるというわけではない) 場合もあれば、間主観的体験や共感的理解と呼ぶような自我親和的で自己に肯定的に受け入れられる (ことで、こうした自己の変容に無自覚のうちに身を任す) 場合もある。これらの自己変容は、セラピストの側にもクライアントの側にも、非対称的であるが相互に、共時的に生じている。そこでセラピスト自身の心に生じている動揺や変化に敏感になること

が、面接によって生じている二人の心の情緒的な相互作用の質を理解する重要な手がかりになる。したがって、セラピスト自身が、このクライアントといると、どんな自分になっているか、自分自身をどのように感じるのか、といった自分自身について情緒的モニターを働かせていることが必要不可欠となる。自分自身に生じる情緒的反応は、特定の観念やイメージが浮かんでくるという場合、いらいらしたりつらくなったりといった感情的反応が生じる場合、体のどこかに違和感を感じるといった身体感覚に生じる場合、そして無自覚のうちにクライアントにある言動を行っていたという行動面で現れる場合などがある。これら多次元のチャンネルで多重に自己をスキャンすることが、自己を情緒的にモニターする理想的なあり方であろう。オグデンはここでセラピストが無自覚のうちに行う夢想 (reverie) をモニターする価値を強調している。

オグデンの考察のもう一つのポイントは、面接に臨む両者が、生じた間主体的な自己変容体験から如何に (変容した) 自己を取り戻すかという側面である。オグデンはこれには、分析家の提供する解釈とその解釈を患者が活用することが不可欠であるとしている。解釈という言葉を広くとるならば、「いまここで、二人の間に、何が起きているか」を第三者的に眺める観点とすることもできるだろう。面接の当事者でもあるセラピストがこうしたもう一つの目を生み出し維持することは容易なことではないが、この視点を欠くと、面接プロセスは終わりの見えない情緒的関わりに墜してしまいかねない。この側面は、スーパービジョン等、第三者の目を介させることで得られる部分が多いと思う。

最後に、この面接過程のモニタリングは、マクロ・レベルとミクロ・レベルの両レベルで行うことが望ましいと筆者は考えている。マクロ・レベルとは、事例検討会などで、何回にもわたる面接経過を通して聞くようなレベルである。一方、ミクロ・レベルとは、瞬時瞬時に心や体に去来し移り変わっていく、微細な観念・イメージ、感情、感覚等の流れをなるべく忠実に追うというレベルである。これについては、スターン (2004) の「プレゼント・モーメント」に詳しい。上述したモニタリングの二つの観点は、マクロなレベルでもミクロなレベルでも有

効な観点だが、ミクロなレベルによりふさわしい観点であることは違いない。したがって、発達臨床の視座からの面接過程の着眼点とは、主にミクロなレベルで、自己への情緒的モニタリングと、二人の心の間で生じている情緒的相互作用のモニタリングを継続することと言えるだろう。これらは知的にのみ習得できるものではなく、そうした観点の学習と経験の蓄積が不可欠である。今回試みた模擬面接とその振り返りは、院生にそういった面への自覚を促そうという目的で企画・計画されている。

Ⅲ 本年度の模擬面接の手順

先述したように、この模擬面接の取り組みは、年々少しずつだが修正を加えて続けてきた。今年度は、次のような手順で行った。

(1) 模擬面接への参加の誘い

博士前期課程 1 年の院生に対し、前期授業期間中にこの模擬面接の手順 (後述) を紹介し、参加の有無を問うた。この取り組みは正規の実習科目の中に位置づけられているものではなく、あくまで自主的な試みである。したがって参加を義務づけるものではなく、また参加したことで生じる心身の変調については自己責任と見なすことを、院生には事前に十分に確認した。結局、1 年の院生全員が参加を申し出た。

(2) 研修生との模擬面接にクライアントとして参加

参加の意志を表明した院生には、まず、自らがクライアントの側に立って、模擬面接を経験させた。院生の相手になってセラピストの側に立ったのは、今年度、研修生となった大学院修了生であった (本分野では、博士前期課程を修了した院生は 1 年間に限り、研修生として大学院に在籍し、心理相談室スタッフとして相談活動に従事することを認めている)。この模擬面接の目的は、セラピストとしての体験をする前に、クライアントの側から面接という場を体験することが意義深いと考えたからである。院生には自分自身のことを話すよう求めたが、治療や分析を意図した面接ではないこと、あえて悩みや問題を語る必要はないこと、むしろ話してみたいこ

と、聞いて欲しいこと、あるいは研修生の胸を借りて自分なりに言葉にすることで考えてみたいこと等を語るよう促した。そして自分の思うようにこの時間を使うように教示した。研修生にも模擬面接の趣旨をよく説明して、自発的な参加を申し出た者に取り組んでもらった。この面接場面を面接に臨んだ両者の許可を得てビデオ録画した。この模擬面接の振り返りは、面接直後に両者が各々用意されたアンケート用紙に記入するものと、面接場面の映像を見た後、同じく映像を見た筆者との間で個別に面談形式で振り返るものとの二種類で行った。

(3) 学部生に向けた模擬面接参加への誘い

次に、院生がセラピストの側に立って行う模擬面接の相手、すなわちクライアントの側で参加協力してくれる者を、学部学生の中から募集した。この学生ボランティアの募集にあたっては、この取り組みの趣旨を書面にて熟知させた。具体的には、この模擬面接が院生の面接練習と面接プロセスの研究の二重の目的がある（面接場面の録画を予定していること）こと、模擬面接なので面接協力者の治療や分析を目的としたものではないこと、個人のプライバシーには最大限の配慮を払うこと、この取り組みへは自発的な参加であり生じた心身の変調は自己責任と見なすので、自分自身の安全を第一に考え無理をしないこと、そしてこの活動を学業成績等には反映しないことなどを伝えた。さらに面接協力者を臨床心理分野の教員のゼミ生（3、4年生）に限定して募集した。そうすることで、この模擬面接に参加する両者を、臨床分野の教員が把握している学生に限定し、万が一の事態が生じた際に適切な対応ができるように配慮した。結局、6名の学生が、面接協力者として名乗り出てくれた。

一方、セラピスト側に立つ院生にも、この面接の目的と狙いを書面にて確認させた。すなわち、面接協力者の語る内容を傾聴し、協力者の心にあるものをできるだけ適切に理解し、その理解を協力者との間で確認すること、協力者の心理的問題を援助したり解決策をアドバイスするのが主たる目的ではない（してはいけないとは言わないが）ことも付け加えた。面接は1回に限定し、心理相談室の面接室で40～50分の時間内に納めるよう伝えた。使用する面接

室は対面に4人掛けのソファが置かれた応接室型であった。座り方やソファの移動の可否については何も指示しなかったが、院生たちはソファを動かすことなく、対面または斜め対面で面接を行った。この模擬面接は、研修生との模擬面接を経験した後、実際の心理面接を開始する（たいてい秋以降に1年生は面接を担当する）までの間に行うよう、院生に伝えた。院生は、筆者から相手の学生の連絡先を受け取り、日時の設定等は自主的に行った。結局行えた模擬面接は、院生一人が面接協力者と一人ずつ（一人だけ二人の協力者と面接を行えた）、計6つの模擬面接を行えた。

(4) 学部生との模擬面接の振り返り

院生による学部生との模擬面接の振り返りは研修生との模擬面接に準じて次のように行った。まず、面接終了後直ちに、各自が用意されたアンケート用紙に答える形で、面接での体験を振り返った。次に録画した面接場面の映像を院生が見返し、そこで感じたことや気づいたことについて、筆者と個別に振り返る時間を設けた。この個別の振り返りには筆者もまた面接の映像を見てから臨んだ。一人当たり30～40分程度であった。さらに個別の振り返りが終わってから、今度は参加した院生全員が集まって、一人ひとりの面接場面の映像を鑑賞した。面接過程の全てを見る時間がなかったので、筆者が事前に用意した面接の特定部分（全体の3分の1から半分程度）を皆で見て、感想を語り合ったり、面接に臨んだ院生の心理的体験を共感的に追体験しようとしたり、また面接協力者をどう理解するか等、院生からの自発的な発言によるディスカッションを行った。この集団での振り返りは、一つの模擬面接について、40～60分程度かけて行った。

(5) 謝礼

この模擬面接の取り組みに参加した、大学院生、学部生、研修員には、学部助成金から、面接とその後の振り返りへの協力に対し、謝礼を支払った。面接場面の映像および振り返りのために記入を依頼したアンケート等、個人情報にあたるものはすべて筆者が管理することにした。研究でもあるので、学会等での発表や学術雑誌等に投稿する場合のあること

は事前に書面で了解を得ているが、あくまで個人を特定するような情報を載せないという条件で了解を得た。

IV. 本年度の模擬面接とその振り返りの結果および考察

(1) 研修生との面接体験とその振り返りの結果と考察

まず前章②で述べた研修生との模擬面接体験とその振り返りについて、結果と考察を述べる。最初に院生と研修生が面接終了後に記入したアンケートの記述の分析を述べ、次に面接場面の映像を見た上で行った筆者と院生との個別の振り返りについて述べる。

① 院生と研修生のアンケート記述の分析

～院生と研修生に共通する二つの対照的な面接体験とその対応性～

面接終了直後に記入することを求めたアンケートは自由記述式で、院生と研修生とで内容が若干異なる4つの問いを用意した。院生用は「最も印象に残っていること」「面接中に感じた気持ちや考え」「苦心したり、気がかりだったり、困ったこと」「新たに気づいたことや考えたこと」の4つの問いから成っていた。一方研修生用は「最も印象に残っていること」「面接中に感じた気持ちや考え」「面接で努力したこと、苦心したり、迷ったこと」「普段の心理面接との違いや共通点」の4つの問いから成っていた。4番目の問い以外はほぼ同じである。これを院生と研修生の各々が別途記入した。

まず、院生のアンケートからは、比較的共通する記述をつなぎ合わせることで、以下のような面接場面での体験が浮かび上がってきた。院生たちは話す内容を特段準備していたわけではなかった。しかし研修生の「程よい問いかけ」や「話したことを整理してくれるような応答」にも助けられて、自分の内面を言葉にすることが予想以上にできたようであった。院生たちは、「こんなに話すとは自分でも驚いた」し「自分のことに没頭して考えたり話しても、きちんと耳を傾けて聞いてもらっている」体験は「とても新鮮」なものであったらしい。「自分の思いを言葉にするのは難しくて」、研修生に「分かって

もらえるだろうか」と不安も生じたが、「自分のことを分かってほしい」という気持ちが強く湧いてきて、発言を続けるうちに「予想外に話が深まった」、 「思いもよらない結びつき」に気づくことも生じた。そうなので、「話を聞いてもらうことがこんなに気持ちがいい」ものだ初めて気づいたし、機会があれば「カウンセリングを受けたくなった」と答える者も複数いた。その一方で、「話せねばならない」というプレッシャーを感じて緊張したり、研修生のうなずきや視線の動きに過敏になって、「自分の話し方がまずくて、理解されないのではないか」と不安になって焦ったり、研修生の一挙手一投足に一喜一憂したことを報告する者も複数いた。上記の対照的な二つの面接体験は、同一の院生のアンケート記述にも混在していたが、前者の体験が優勢だった院生と後者が優勢だった院生とに二分することができた。前者の体験は、面接の場で自分自身に没頭する体験と言え、これを〈セラピストの居るところで自分に耽ること〉と名づけた。対照的に後者は応対した研修生との間にズレを感じ、自分よりも相手の反応に意識が集中し、そのズレを埋めようと焦ったり、またわかり合えないことに困難を感じたようだ。これを〈セラピストを前にして自分でなくなる〉と名づけた。

一方、研修生のアンケートからもまた、上述した院生の面接体験にほぼ対応するような二種の記述を見出すことができた。すなわち、普段の面接よりも「落ち着いて、ゆったりとした気持ち」で、院生の思考や発言を妨げずに待って、院生の心の動きに「寄り添う」ように対応できた。無理に深めようとしないで、院生の方から「自発的な発言」や「発見」が見られたと受け止められていた。その一方で、「緊張して落ち着かず」、院生の話を消化できないまま面接が進んでいって、「十分に理解できなかった」。また院生の内面がわからないだけに「沈黙が居心地悪い」が、それをどうにかすることもできずに終わってしまったという記述も見られた。前者を〈クライアントを見守る環境としてのセラピスト〉と名づけ、後者を〈クライアントとつながれないセラピスト〉と名づけた。

しかも〈セラピストの居るところで自分に耽ること〉を優勢に体験した院生に應對した研修生は、〈ク

クライアントを見守る環境としてのセラピスト)と自身を体験していたし、対照的に研修生が(クライアントとつながれないセラピスト)になっていた際には、院生も(セラピストを前に自分でなくなることを)を優勢に体験しているというように、両者の間には対応性が見られた。前者の院生—研修生ペアは、両者がともに自分自身で居ることを許され、自分の心に生じることに身を委ねているようなあり方と思われる。ただしこの二人で居ながら各々が一人でも居るような体験は自然に生じているわけではない。研修生は院生の話がよく理解できると感じており、そう感じるからこそ、理解や共有を意図した他者指向的な働きかけをあえてする必要もなかったと言えるし、院生も研修生の応答の端々から理解されていることが確信できたので、安心して自分に耽ることができたと言えるからだ。そこには何らかの間主観的体験が生じていて、それが土台にあつての自分に耽ることが可能になっているように思われる。反対に後者のペアは、両者が相手にわかってもらおう、相手をわかろうとするにもかかわらず、互いに理解できた、理解してもらえたという実感が得られず、ますます他者指向的になって自分でなくなっていったように思われる。前者とは対照的に、間主観的な心情の共有が生じているとは感じ難かったと思われる。(ただし互いに、相手を理解できていない—理解されていないという意味では、両者が同一の体験を非対称的な形で共有していたと言えなくもないが)

②面接場面の映像と、映像を見た上での院生との個別の振り返りの分析

～体験の間主観的共有を生み出す両者の相互調整～
次に、筆者が実際に面接場面の映像を見、同じく自分の面接場面の映像を見た院生との間で行った、面談形式の個別の振り返りについての分析を述べる。面接場面の映像を一見しただけでも、上述した二つの対照的な面接体験と、院生と研修生の体験の対応性は明らかであった。院生が(自分に耽る)体験が優勢なペアの面接映像では、ごく自然な語りが見られ、映像からも緊張の解けた自由でリラックスした場の空気が感じ取れた。ただし、アンケート記述にあったような相手の存在を気かけずに自分に耽るというふうには見えず、むしろスムーズなやり取りが進んでいくとか、二人の話がかみ合ってい

るという印象が強かった。それは主観的な体験と、第三者的に面接場面を見て心に生じる体験とにズレが生じるからかもしれない。他方、アンケート記述からは間主観的な体験の共有が互いに困難であったと答えていたペアの面接映像からは、見ている筆者も緊張感や困惑感が伝わって重苦しい感じになったし、自分ならこう応えるのだからといった筆者自身の反応が脳裏に浮かぶことが多かった。明らかに筆者自身に、面接の場に介入して二人のやり取りを調整し間主観的な心情の共有を作り出したいという逆転移的な反応が生じたわけだ。

一方、面接映像を見た院生の反応は、アンケートの記述と大きな差はなかったし、個別の振り返りで新しい気づきや発見がいろいろあったとは言い難かった。これは筆者の振り返り面談の進め方の問題もあったらうかと思う。なぜならアンケートの記述をもとに院生にその内容を子細に聞くような面談のスタイルになっていたから、記述から外れる内容は語りにくくなったかもしれない。その中で、印象的だったのは、(自分に耽る)体験ができたと答えた院生は、面接映像を見た際に、「一緒に考えてくれていた」、「話をちゃんと覚えてくれていた」というように、改めて(自分に耽る)ことが共同作業であったことに気づいたようであった。これは前項で述べたように間主観的な共有が(自分に耽る)行為を支え続けたことを示していると同時に、間主観的共有が「理解」を核にした両者の相互調整によって可能になる動的なプロセスであることを示していると思われる。また共同作業に見えるという印象は、先に筆者が映像を見ての感想として述べた、二人がうまくかみ合ってスムーズに進んでいくという印象とも合致しているように思われる。

③院生と研修生との面接に関する考察

院生は研修生との模擬面接をクライアントの側で経験することを通じて、面接という場で生じる典型的な二つの体験を(ペアによってどちらか一方が優勢な形ではあったが)経験できたと考えられる。このうち(自分に耽る)体験はもちろん、ウィニコットのいう一人で居られる能力、そしてそれが誰かと居て一人にいるという体験から生じるという彼の発達論、さらには心理療法とは二人の遊びの領域を重ね合わせたところに生じるという彼の臨床論を下敷

きにしていることは言うまでもない。ところで二つの体験はいずれも、院生と研修員のどちらか一方の個人的要因から強く生じているとは言い難いものであった。

ただ、〈自分に耽る〉体験が十分にできた院生は、自分の話が研修生に通じているということを確信していたという意味で、間主観的体験が生じていたと言える。言い換えれば、自分の話が理解されている、あるいは、自分の伝えたい意味が相手にきちんと受け取られているといった、意味の共有への確信があったと思われる。そしてこの意味の共有は共同作業であり、両者の相互調整によって生じることが面接映像からも確かめられた。しかし院生は初めから自分の言いたいことが明確にあったわけではない。いわば研修生に梯子をかけてもらう (scaffolding) ことで次第に自分の話している事柄の意味に気づいていったというのが実際に近い。〈自分に耽る〉体験は自己意識の拡大や深化に結びつくが、研修生の意識を梯子にして拡大や深化が生じていたと考えられる。これはトロニック (2007) が乳児発達において、養育者との相互調整による養育者との意識の共有を介して乳児の意識は拡大するとしたモデル (Dyadic Expansion of States of Consciousness Model) に酷似している。

一方、〈自分でなくなる〉体験の方は対照的に、間主観的共有の欠如が特徴的であった。このとき院生も研修生も面接という場に留まることに情緒的な苦痛を覚え、何とか苦痛を軽減したいと間主観的な共有を作り出そうと躍起になっているように見えた。しかしその努力がなかなか実を結ばないのは、相手が何を伝えようとしているのか、どのような意図や意味が込められた話なのか、もう一方に理解できなかった面が大きかったからだと思われる。間主観的な情緒の共有を左右する重要なポイントは、互いの意図や話にこめた意味が通じるかどうかにあると考えられる。ただ、前述した〈自分に耽る〉体験が優勢であっても、ミクロ・レベルでは齟齬や意味不明な場面が数多く生じている。だからこそそのズレを埋めようとするミクロ・レベルでの修正作業が両者の間で活発に作動している。相互調整という共同作業はまさにこの修正作業に他ならない。一方〈自分でなくなる〉体験では、修正の失敗、相互調

整の失調の累積があり、心の間主観的共有の欠如が面接の中で修正され難かったと見ることができる。

前述したように、話に意味を見出すことの困難、相互調整の失調、間主観的共有体験の欠如、過剰な他者指向性と〈自分に耽る〉ことのできなさは、一連の連鎖を為した面接の場の体験である。その結果生じる〈自分でなくなる〉体験は、オグデンの言う、分析場面で生じる第三主体に、面接の当事者二人がその主体を多かれ少なかれ乗っ取られるという間主体的体験としても理解できるだろう。なぜなら、この時、院生も研修生も互いに相手の意図が読み取れず、代わりに自分なりに解釈した相手に合わせようと自分を変えていくわけで、共に想像上の相手との関係に拘束されていくことが生じる。すなわち研修生と院生とが共に、非対称的な形であるが、面接を通じて立ち現れた第三主体との間主体的関係に閉じ込められてしまうと見ることができるからである。この拘束状況から自己を解放し取り戻すにあたっては、オグデンが示しているように、「今ここで、二人の間に何が起きているかを」第三者的に眺める観点が必要となろう。その意味で、当事者としてではなく第三者として面接場面の映像を鑑賞すること、あるいは当事者とは異なる第三者の観点を得て、面接場面を振り返ることが有意義ではないかと考える。この点については、院生の学部生との模擬面接を素材に行った、面接場面の映像鑑賞と院生全員で行った面接の振り返りの効果を分析することで検討したい。

(2) 院生と学部生との模擬面接とその振り返りセッションの分析の結果・考察

① 研修生との模擬面接と学部生との模擬面接の全般的な違い

研修生との面接体験と同じく、今回も、模擬面接終了後、院生と学部生とが各々面接の振り返りアンケートを記入しているので、まずはその記述を分析しようとした。しかし学部生の記述が少なく、アンケートだけでは学部生の面接体験を把握するのが困難なものもあった。そこで面接場面の映像も見た上で、再度アンケートの記述を分析した。その結果、研修生と院生との模擬面接に見られたように、学部生の〈自分に耽る〉体験を院生が見守り、気づきや

心の整理を手伝った面接を見出せた一方で、特に院生が面接の場で〈自分でなくなる〉体験をしていることを思わせる記述も複数見られた。しかも院生が〈自分でなくなる〉という体験は、面接のペアによって様々なあり方から生じているように思われた。それは学部生と院生とが面接に持ち込むものが交互作用を起こし、その相乗効果によって面接場面に特異な関係状況が引きこされることとして理解できると思われた。交互作用を分けて述べることは本来不適切ではあるが、記述の都合上、あえて学部生が持ち込むものと院生が持ち込むものとを分けて論じることとする。

A 面接過程の行き詰まりを引き起こす学部生側の要因

面接過程の行き詰りと院生が〈自分でなくなる〉という体験は、一つには、模擬面接にクライアントとして参加した学部生の要因によって生じていると考えられる。というのも、院生がクライアントとなった先の模擬面接に比べ、面接でどういふことを話せば良いのか、どのようにふるまえば良いのかについて、学部生は不確かな理解しかもたず、不安でおぼつかない思いをしており、そのため院生の言動を手がかりに（自分なりに解釈して）自らの言動を規定していることが多かったからだ。先の模擬面接と同様に、学部生にも「自分のことを自由に話す」と教示したものの、教示の意味するところが、院生が了解したようには伝わらない学部生もいた。もちろん学部生の中にも教示の意味が呑み込めて、先の模擬面接で院生が行ったように自らの心理的体験を自発的に語る者もいたし、そういう学部生の中には〈自分に耽る〉体験をした者もいた。しかし「自分のことを話す」ということがどういうことか分かりづらかった学部生は、〈自分に耽る〉体験は困難であった。そのため、学部生との模擬面接では、面接を進めながら、心理面接とはどのようなものなのかを学部生にわかってもらう作業も同時に必要であったと思われる。心理面接とは日常会話とは違うし、また他の職業場面で生じる面談とも違う。おそらく学部生がこれまであまり経験したことのない種類の出会いと関係である。大げさに言うなら、異文化との接触、異文化に馴染むことに相当する体験であり、そういうプロセスが生じるのだと考えておかね

ばならない。実際の心理面接においても当初、クライアントとこうしたプロセスを歩むことは多い。したがって院生が直面した状況は、先の研修生との模擬面接よりもはるかに実際の面接に近い状況だったと考えられる。

さらに模擬面接を難しくした学部生側の要因に、模擬面接に対するアンビバレントで複雑な思いと態度があったように思われる。前章で手続きを示したように、学部生は自発的に模擬面接に参加したのだし、またこれが本当のセラピーや分析ではないこと、したがってそのような場面で相談するようなことを話さなくてよいこと（や話すことを望まれていないこと）は分かっているはずではあった。しかし実際には、違和感を覚えた体験を話すうちに悩みや問題と感じるテーマへと話が発展することが多かったし、むしろそれは必然的なことでもあった。これがこの取り組みの大きな問題でもあるのだが、それゆえに学部生は一方では院生に対して期待や依存を向け、院生の意図するところを汲み取ってそれに適応しようと振舞うと同時に、猜疑心や依存あるいは従属への抵抗から院生を試すような態度で応じることも生じ易い。すべての学部生との模擬面接にこうした状況が生じたわけではないが、平たく言えば、適切な心理的距離を取ることの難しさが生じ易かった。（もちろん、研修生との模擬面接でクライアントの側にいた院生にこの手の心理的距離の失調が生じる危険がなかったわけではないが、今回はそうしたことは生じなかったように思える。院生自身の心理的健康さもあったのだろう。そういう理由でか、筆者は面接映像を見て、院生が理想的なクライアントに感じられた）そこで院生は、面接の中で学部生とどのような心理的距離をどのようにして見出していくかという、これまた極めて実践的な状況に置かれることになったと言える。

B 面接過程の行き詰まりを引き起こす院生側の要因と、それが学部生の要因との間で生じる交互作用

今度は模擬面接のあり様に影響を及ぼす院生側の要因について検討する。これについては既に本紀要の前号で詳しく述べたが、今回学部生と模擬面接を行った院生についても同様の心理面接へのバイアスが見いだせた。それは面接後のアンケートのみなら

ず、面接場面の映像からも明らかであった。まず第一に挙げねばならないのは、**過度のホスト精神**である。あるいは「セラピスト」役割への過度の同一化と呼んでもよいだろう。括弧つきで「セラピスト」と呼ぶのは、本来のセラピストの役割の内、ある特定の面のみが突出して重視されている感が否めないからである。具体的に述べるなら、学部生が緊張せず、心地よく過ごせるような雰囲気作りを何物にも増して重視しているように思われる。そのために、学部生の話の腰を折らずに、妨げないように、批判をせず、全てをそのまま受け入れることが強調されていた。また自分の感想や意見を学部生に伝えることは控え、たとえ相手から尋ねられても極力個人的な意見は答えずにおく。そしてこれらに反する言動をした際には、「セラピスト」の役割を逸脱したと考へ、いけないことをしたような気持になっているようであった。一方、相手の話を自分が納得できるまで理解しようと詳細に質問を繰り返すことは、相手の心の自発的な動きに干渉する可能性があるとしてはばかれるようであった。そして面接を通して学部生が「スッキリする」といった肯定的な結末が目指されていて、院生との関係も調和的な関係性で推移することが無批判に肯定されていた。しかしこうした院生の態度が学部生にはどう映るのかという点には案外無頓着であるようだし、何より、学部生が何を話しているのか、何を伝えようとしているのかという、字面の背後にある学部生の思いに関心を向けることには意識が向きにくいようだった。上述したように学部生は、この模擬面接でどう振舞うべきかを、院生の言動をもとに解釈し定位していくところが多い。そこで院生のこうした態度は、振舞い方の指針の見出しにくい、言わば真空状態に学部生を置くことになりやすいと考えられる。学部生は振舞い方のヒントが得られず、疑心暗鬼を募らせ、ますます院生の反応に神経を尖らせていく。それを感じた院生の側はますます主体的な関わりを控えるようになっていく。つまり、院生側の要因は学部生側の要因とが交互作用し、面接場面に一つの特徴的な状況を生み出し、両者がその状況にますます拘束されていくという事態が生じ易いのである。

次に、多くの院生が模擬面接の後に語るコメントでもある、学部生の話をごとまで深めて良いのかわ

からないというコミットメントへの戸惑いを第二の要因に挙げられる。一度きりの面接でどこまで聞いて、どこで切り上げればよいのかという戸惑いから、学部生を励ましたり、取り繕っては学部生のお話を収束してしまうような対応をしてしまいがちである。この側面も、上述した学部生側の心理的距離の取りづらさとも連動しているの、院生の側のみの要因というよりも、両者が経験した間主体的拘束状況の内の院生側の経験と見るのが適切である。ただし、学部生がどこまで語ろうとしているのか、あるいはこの模擬面接にどこまでコミットしようとしているのかに、院生が目向け確かめようとしている様子は乏しかった。結果として、院生の態度はずい分遠慮深い、当たり障りのないものにとどまっていることが多い。学部生からすれば、真綿で優しく包まれているような感想を抱くかもしれないが、反面、「セラピスト」という隠れ蓑に心を隠した手応えのない傍観者的な対応だとか、話していることが本当に伝わっているのかどうかかわからない、一人で話をさせられているといった感慨をもつかもれないと筆者は思う。このように学部生も院生もそれぞれが、現実の相手の真意を確かめられなくて、推測した相手の意向に対してそれぞれが自分なりの解釈で対応するような事態が生じやすい。これこそが面接の場に立ち現れる第三者、そして院生も学部生も取り込まれていく間主体的拘束なのである。以上見てきたように、院生が報告した〈自分でなくなる〉体験とは、学部生と院生それぞれが面接の持ち込む先入観や不安が交互作用を生じ、面接場面に両者を心理的に拘束する間主体的状況が生じることとして捉えられる。

②模擬面接の振り返り作業を通じての院生の視点の変化のプロセス

前項で分析した面接過程の行き詰まりと、院生と学部生との間主体的拘束状況が典型的に表れているのが、沈黙という場面である。アンケートでも多くの院生が沈黙に言及していて、「沈黙にどのように対処してよいかわからない」とか「沈黙をおそれ（沈黙が生じないよう）不自然な質問や発言をしてしまった」という記述が複数見られた。面接の振り返りでも、この沈黙の際の主観的な体験や、沈黙に対する院生の言動に焦点化したやり取りが結構生じ

た。本稿では、こうした面接過程の行き詰まりと問主体的拘束状況を破るには、外からの視点を持つことで拘束状況から自己を解放し、自己を取り戻すことが必要であるとの想定を立てている。そこで、ある面接ペアの面接過程で生じた、沈黙とその前後の体験についての自己理解が、振り返りの作業を通じてどのように変化していったかを、臨床素材として以下に示す。それをもとに、面接映像を見たり他の院生の評価を聞くという面接過程を第三者的に振り返る作業が、院生が〈自己を取り戻す〉ことに効果をもたらすのかどうかを検討する。

臨床素材

a 模擬面接の中で生じた沈黙という局面（面接ペア両者のアンケート記述と、筆者の面接映像鑑賞をもとに再構成した、沈黙に至る面接プロセス）

この面接ペアでは、学部生は自分の気になっている側面について、面接の当初から積極的に語った。彼女は個人的な内容に話が及ぶことを自覚しつつも、「スッキリしない」気持ちを抱えて、話さずにはおれない様子であった。これに対し、院生の方は、「学部生の話の内容や気持ちを理解しようと努力する」と同時に、「普段よりも控え目に」反応しようと意図していたらしい（面接後のアンケートより）。控え目というのは、自分の方から言語的であれ非言語的であれ、何らかの方向付けや指示を与えるような反応を控えるという意味であったようだ。院生なりに無条件の積極的関心を学部生に示そうとしたことだったと思われる。

映像を見る限り、実際には院生は何の反応も返していないなどということはなく、学部生の話に相槌を打ちつつ、ところどころでは学部生の話を明確化するための問いも発している。ただ、学部生が「～だろうか?」と自問自答していることに対しては、院生は特別な反応を返すことなく、学部生は次の話を続けるというパターンが繰り返されていく。それに伴い、学部生の問いかけはより切実なものになっていくように筆者には感じられた。それに対し、院生は次第に、慰めるような、あるいは学部生が否定的な自己理解に進むことに歯止めをかけようとしているような対応を繰り返すようになってい

た。こうして面接開始から30分ほどが経過した頃に、初めてやや長めの沈黙が生じる。沈黙は一瞬早く学部生が、続いて院生が噴き出すように笑うことで破られた。そうして笑いに続いて、学部生が「カウンセリングってこんなものなのか」という言葉を発する。これに反応して、院生は自分がカウンセリングをどう考えているかについて、この面接ではここまでで最も長く話すことになった。

b 筆者との個別の振り返りセッションで語られた院生の面接体験

この振り返りセッションで話題にしたことは他にも数点あったが、ここでは以下の2点に絞って述べる。

面接の映像を見た上での院生の第一の印象は、「学部生が頑張ってくれて面接の場を作ってくれている」というものだった。筆者は映像を見て、学生が自分の体験についてとても率直に包み隠さず語っているのに比べ、院生の方は、それを聞いて自分がどのように感じたかをあまり表明していないと感じた。またそのような態度表明の保留は、院生の理解する「カウンセラー」役割ゆえに、不本意ながらそうしているようにも思えた。それゆえ、学部生の否定的な自己認識を打ち消すような発言は、そうした自縄自縛の中で、院生が自分自身に許すことのできた数少ない反応の一つに思えた。したがって院生の先の感想には、「学部生の頑張り」に見合うほどには自分は「頑張れ」ていないという、負目のようなニュアンスが含まれているように筆者には受け止められた。院生は明らかにこの面接の中で、「カウンセラー」であろうとすることと自分で居ることが折り合わないと感じ、引き裂かれる様な葛藤を覚えていると、筆者は映像からも、またこの振り返りのセッションからも感じた。

院生はこの振り返りセッションの最後に次のような感想を述べた。それは、面接を終えた後、学部生が自分とセラピストやクライアントという役割ではなく、日常的な関係として会って欲しいと思っているのではないかというものだった。筆者は、院生が学部生に対して感じた負い目に対する償いへの思いが、学部生が上記の期待を抱いているのではという投影として具体化しているように理解した。しかし筆者はここまで感じる院生の体験に共感することが

できず、この発言をやや奇異な印象で受け止めた。おそらく院生は、学部生の発言に対して、何か肯定的なもの、純粋なものを感じ取ったからこそ、それに応じられない自分に負い目を感じたのであって、「カウンセラー」役割に固執してしまった自分への反省からだけではなかったはずだが、この時点では筆者はそのようには感じ取れなかった。

一方、筆者が映像を見て強く沸き起こったのは、院生の応対に対するもどかしさや歯がゆさでもいうような感情だった。学部生の発言に対して筆者ならいろいろと問うてみたり、気持を明確化するような言葉をもっとたくさんかけるだろうに、と感じたからだ。そして学部生の問いに対して、院生がとった対応を、外罰的な視点から内罰的な視点への転換を学部生が試みているにもかかわらず、それに蓋をして学部生の自己探索を阻害してしまっているように感じ、院生の対応に違和感を覚えた。院生自身も、映像を見てみて、「今なら、もっと訊ねておくべきだったのと思うところがいくつもあった」と語っている。さらに筆者は、学部生話を聞いていて、院生は何を感じていたのかをもっと知りたいと思っただけでなく、院生が感じたことを学部生に返すことにもっと積極的であって良かったとも感じた。学部生の方は話しても話しても、手応えのある、院生の個人としての反応が返ってこない感じがしたのではないかと思っただけでなく、そのいくらかを院生にも伝えた。

しかし筆者がこのように感じられるのは、面接を行った当事者ではないところから来るところが多分にあることを、次の合同での振り返りを経て痛感した。院生自身も面接を終えて、観察者として振り返ったからこそ、先のような発言が出てきたように思われる。おそらく当事者として面接に臨んでいた際には、映像を見て感じ取れるよりも、相手から実に様々な感情を向けられ、自分の中にも多様な感情が沸き起こり、観察者として映像を見る者とは違うはるかに心を拘束された状況が生じていたはずである。面接映像を見るという作業は、面接過程を臨場感にあふれて追体験できるようにばかり考えていたけれど、実際は当事者でさえ、第三者的に客観的に面接過程を見てしまう（もちろんこれには肯定的意味も否定的意味も両面あるが）面のあることをこの時点では十分に気づけていなかった。

c 他の院生を交えた合同の振り返りセッションでの院生の理解の深まり

時間の関係もあって、合同での振り返りは面接の始めの10数分と、沈黙の前後を含む面接の終わりまでの20分弱を、同じく模擬面接に参加した院生で鑑賞して討議した。面接の中盤を抜いたことで、思わぬ効果もあった。というのも鑑賞した院生の一人が、学部生の様子が出だしと終盤とで随分違って見えるとコメントしたからだ。面接を通して見ていた筆者には気づけなかったが、あらためて見るなら、確かに最初の固く主張的な話しぶりに比して、終盤はやわらかく安心して語っている様子がうかがわれた。これは30分かけてセッションを共にしてきた中で培われたものであろうと筆者は考えている。

ところで面接映像を見ての他の院生たちの感想も、先の個別の振り返りの際の筆者の感想に近いものであった。院生たちは、学部生が語る話の内容に強く関心を示し、そこから学部生にもっと訊ねてみたいと感じているようであった。その一方で、自らも面接当事者としての体験を経たので、「このような発言をされたらやりにくいよね」とより当事者寄りで共感的なコメントを出す院生もいた。面接を担当した院生もこうした受容的な雰囲気の中でセッションの際の体験を再度思い返すことができるようであった。こうした側面は筆者との先の個別の振り返りでは生じにくかった。教員と院生という対等でない関係や、筆者の院生に対する態度が、こうした安心して自分の体験を振り返ることを妨げたのかもしれない。

面接の映像を見て、沈黙とその後の院生の自己開示的な発言に対しても、院生が自分の考えを語るよりも、学部生の考えや気持ちをもっと訊ねてみたらという、コメントが出されたが、院生はそれに対して、次のような面接の際の心の動きを想起し発言した。「実はここまで相当に発言を控えて我慢していた。もうこのあたりが限界と感じて普段の自分に戻ってしまった。カウンセラー然としてしていることが不誠実に思えて、カウンセラーとしては逸脱したことだとわかってやっていた」「彼女にもいいところがあると感じたし、それを伝えたかった。」「彼女が本当によく話してくれているように思えたと、それに応えたいという思いもあった」。

筆者は面接を担当した院生が、第三者のコメントに心を開きながらも、自分自身の当事者としての体験を見失わず、自分の心の中で対話をさせた中で先のような発言が生じたのだと思った。また、面接の中での「カウンセラー」としての自縄自縛に陥っていたことに加えて、学部生の「いいところ」を認めてあげたい、守ってあげたい、自ら否定して欲しくないといった思いこそが、学部生の否定的な自己吟味に待ったをかけ、学部生の発言を肯定的に解釈し直して返そうとした理由ではないかと筆者は感じた。それだけ学部生の発言に院生は心を動かされていたのだし、そこに学部生の思いと院生自身の個人的な思いとが共鳴し合う状況が生じていたのだと思う。おそらく映像を見るだけの者にはこうした当事者体験までは共感し難いのではないかと思う。当事者としてではなく第三者として見るなら、距離を置いて両者の話とやり取りを見聞するので、どうしても自分とは切り離して分析的、あるいは批判的に見てしまいがちであると感じた。ここで院生は第三者として面接映像を見た者の意見を鵜呑みにして当事者としての自身の体験を否定してしまうのではなく、第三者からの外から得られた視点と当事者体験との緊張関係を心に持ちこたえることができたのあり、それゆえ先のような発言と気づきも生じてきたと思われるのである。

d 模擬面接の最終シーン

学部生との模擬面接は、沈黙と院生の自分の考えを語った後、かなりフランクな語り合いになった。学部生は院生にこのような体験はないか？その時院生ならどう考えるのか？と尋ね、院生も戸惑いながらもかなりありのままの自分で話している。これを受けて学部生は自分と院生とはやはり違うという感想を述べる。このプロセスを院生は良くなかったのではと気にしていたが、上記の振り返りセッションを経た筆者はむしろ肯定的に受け止めている。学部生はこのとき自分を取り戻したのだと思う。問題を内に抱える自分として、自分を再認識できたのだと思う。〈自分を取り戻す〉ためには、面接の中で生じた間主体的な拘束から自分自身を解放できなければならない。それを沈黙後のやり取りで行ったのだと思う。しかしこの〈自分を取り戻す〉という作業は、院生が〈自分を取り戻す〉作業と並行して進ん

だのであり、その意味でこれもまた、面接の当事者二人の共同作業なのである。

③模擬面接の振り返り作業の意義

行った面接の映像を見たり、同じく映像を見た他者とともに振り返ったりする振り返り作業は、当事者としての面接体験を想起させると同時に、当事者であることを離れて第三者の目で面接を振り返ることを促すものであった。今回は紙面の都合で取り上げられなかったが、別の院生は学部生の話が字面ではわかってもその背後にある意味が理解できず、面接に強い不全感とセラピストとしての無力感を味わったようだった。こうした場合には、学部生の話に含まれている意味や気持ちの動きを第三者に指摘されることが、面接での院生の体験や面接過程を推進させる上で欠かせないものだと思う。しかし今回示した例にあるように、第三者の指摘を鵜呑みにするだけでは、院生の面接体験は深まりや展開が生じ得ない面もあるように思う。必要なのは**第三者的観点と当事者としての現場での体験との緊張関係に持ちこたえること**であった。言い換えるなら、振り返りセッションの中で〈自分でなくなる〉ことから〈自分を取り戻す〉ことへと院生がプロセスを進めることができた結果として、面接での体験を一步深く理解できたのだと考えられる。模擬面接は1回きりであり、振り返りセッションの効果が本面接に反映されるかどうかを確かめることはできなかったが、**模擬面接と振り返りセッションでの院生の体験が共に〈自分でなくなる〉ことから〈自分を取り戻す〉ことへと進むことで変化が生じた点は興味深い**。こうした考察は、スーパービジョンや事例検討会のあり方に示唆を与えるものと思われる。

V 総合考察

(1) 心理面接に臨む院生の問題と課題

今回の模擬面接の目的の一つが、心理面接を始めようとしている大学院生に共通した課題を明らかにすることであった。前章で述べたように、院生は傾聴、共感的理解、受容といったカウンセリングの条件に忠実であろうとするあまり、かえって相手への自然な関心と人間らしい反応性が疎かになり、本当の意味でのクライアント理解が阻害されてしまいや

すいことがわかった。そうなるともますます形骸化したマニュアル的反応にしがみつき、目の前のクライアントよりも自分の緊張や不安に意識が向きがちになるという悪循環が生じる。こうして「カウンセラー」や「セラピスト」役割への自縛自縛が生じ、面接の場で〈自分でなくなり〉、クライアントに〈自分に耽る〉体験の場を提供できなくなっていく。

上記とも関係するが、院生はクライアントとの関係を対等なものと思えようとしがちである。しかし実際には、クライアントはセラピストの言動をもとに面接場面での振る舞いを決めていくのであり、クライアントには言わばセラピー文化に馴染んでもらわねばならない。そこにはセラピストの主体性や能動性も必要となる。それをクライアントを尊重して手控えてしまえば、クライアントは途方に暮れてしまい、学部生との模擬面接で生じがちだったように面接過程も行き詰まる。

最後に上記の平等意識と受け身的な態度は、自信のなさの裏返しでもあるのは間違いなからう。そして自信のなさは、クライアントのことがわからない、だからどう接してよいかわからないことからきているように思う。模擬面接を通して、セラピストとしてもクライアントとしても、**理解できている一理解されているという体験が、如何に自信と安心をもたらし、主体性を強化することを院生は実感できたと思う。**このようにクライアントを理解することの重要性が十分に院生に認識されていないのではないかと思う。理解するためには相手に尋ね、理解を共同で生み出していく作業が不可欠であり、この共同探索という目的と中身があってこそ、先のカウンセリングの条件は形骸化したマニュアルではなく実質的な役割と効果をもつものとなる。このように臨床活動の理解の再構築が求められるが、これは今回の模擬面接のような実践を通しての体験的学習が効果的に思われる。

(2) 教育法開発に向けての課題

先に述べた院生の抱える問題と課題を如何に克服するかを考えていけば、どのような院生の臨床教育が望まれるかに行き当たる。まずクライアントとの会い方とか、面接の進め方といったハウツウへのこだわりと過大評価を修正すべく、脱学習を行う必要

があるだろう。それは知的な学習と、体験を通して学ぶことの両面から進めるべきかと思う。知的な面では、クライアントを理解することの重要性と、そもそも理解するとはどういうことなのかを基本的なところから学び直すことも必要かと思う。その多くは大学院に進学する前に学部教育のレベルでやっておくべきことだとも思う。おそらく学部でも大学院でも、人を心理学的に理解するための多くの科目が用意されているに違いないが、それらが院生の中にしっかり定着するように組織されているか否かを再検討しなければならないだろう。

知的な面での学習は、体験学習と有機的に統合できる形で組織されてこそ、真に院生の臨床的センスの向上に役立つと考える。体験学習もまた学部レベルから数多くの面接実習や心理テスト実習が用意されている。しかしここでも実習は面接の進め方やクライアントの査定の方法を学ぶ技術的ハウツウ学習の科目と受け取られていないかの吟味が必要である。これらの科目はクライアントという一人の人物を肌で感じ取るように理解するにはどうすれば良いか、クライアントの苦境に対して自分に何ができるのかと自問自答する中で、こうした技能が不可欠であるとの自覚があってこそ、主体的に学びとられその真の目的に生かされるのであろう。

そういった意味で、今回の模擬面接のように、院生自身が臨床的状况で困難に直面し、自分に足りないものに適切に気づくという体験(学習)が欠かせないと思われる。知識を蓄積して実践に応用するという方向ではなく、まず実践で困難に直面し、それを克服するためにはどのような知識や技能が欠かせないかを自覚させて学ばせるような課題解決型の学習もまた重要であろう。ただその際にも、適切に自分の問題や課題に気づくことが不可欠であり、それには本稿で検討したように、第三者の視点を入れて困難な状況を振り返る局面が欠かせないと思う。さもないといたずらに自分を責めるか相手を責めるかで、そこから学ぶことは困難であろう。大学院教育でこうした教育内容に関係するのは、事例検討会やスーパービジョンであるから、これらの質をどう高めるのかという問題にもつながるだろう。

最後に、心理臨床はセラピストが主体的にクライアントと関わらないところには生じない営みだと筆

者は考えている。それは実習や事例検討会、スーパービジョンでも同様だと思う。本稿でも検討したように、第三者の視点に取って代わられて当事者としての自分を失うことなく、両者の緊張関係の中から再び自分を取り戻すプロセスが、こうした教育カリキュラムにおいても保障されなければならない。そうあって初めて、院生は臨床場面においても主体を失いそうになりながらも取り戻すことで、クライアントの主体的な生き方を援助できる臨床心理士へと成長できるように思う。臨床家の養成教育には臨床的なセンスとその具体化が求められているのである。

文 献

- Bråten, S. (Ed.) 1998 *Intersubjective Communication and Emotion in Early Ontogeny*. Cambridge University Press.
- 石谷真一 2007 「自己と関係性の発達臨床心理学」 培風館
- 丸田俊彦 2002 「間主観的感性」 岩崎学術出版社
- Ogden, T. 1994 *Subjects of Analysis*. Jason Aronson Inc., New York (和田秀樹訳 1996 「「あいだ」の空間」 新評論)
- Ogden, T. 1997 *Reverie and Interpretation: Sensing Something Human*. Paterson Marsh Ltd and Jason Ar-

onson Inc., London. (大矢泰士訳 2006 「もの想いと解釈」 岩崎学術出版社)

- Stern, D. 1985 *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books. New York. (小此木啓吾・丸田俊彦監訳 1989 「乳児の対人世界」 岩崎学術出版社)
- Stern, D. 2004 *The Present Moment*. W.W.Norton & Company. New York/London (奥寺崇監訳 2007 「プレゼントモーメント」 岩崎学術出版社)
- Stolorow, R., Brandchaft, B. & Atwood, G. 1987 *Psychoanalytic Treatment: An Intersubjective Approach*. The Analytic Press Inc., New Jersey.
- Tronick, E. 2007 *The Neurobehavioral and Social-Emotional Development of Infants and Children*. W.W. Norton & Company. New York/London

付 記

本研究は、2007年度神戸女学院大学人間科学部教育・研究助成「臨床心理士候補生の臨床感覚を涵養する指導・教育システム開発のための調査 ～模擬面接におけるクライアント体験およびセラピスト体験を通して～」を受けて行われたものである。

本研究に被験者として、また協力者として関わってくれた、臨床心理学分野の大学院生と研修生、また人間科学部心理・行動科学科の学生諸君に心より謝意を表したい。